

革命的社會主義労働者党指導者 J. アルマーヌについて —— 「フランス書籍労連における J. アルマーヌ」 のための準備的考察 ——

清 水 克 洋

要 約

19 世紀末から 20 世紀初頭フランスにおいて、革命的社會主義労働者党（以下 POSR）の領袖であった J. アルマーヌに関して、フランス書籍労連内での活動の解明は残された課題である。J. アルマーヌ研究の概括によって、その準備作業を行う。

日本において、アルマーヌは労働者主義、反インテリ・反権威主義の体現者として評価された。フランスにおける研究がこのような見方のもとにはいるが、ここでは、アルマーヌの中での社會主義と共和主義、反権威主義とアルマニストとの呼称の関係が問題提起される。フランス書籍労連について研究した M. レベリユウは、アルマーヌが労働組合よりも POSR での活動に力点を置き、印刷所経営を組合活動よりも重視したとする。

それ以降の研究として、M. ウィノックは、アルマーヌが、下部の黨員、労働組合員と対立して、反ブーランジスムの闘いで急進派ブルジョワジーと提携したとし、アルマーヌにおける共和主義と社會主義の対立・共存を強調する。S. レイノルは、アルマーヌとパルティ・ウーヴリエ紙（以下 P.O.）の関係を解明する。第 1 期は、V. シモンの資金援助により、反ブーランジスムの闘争のための急進主義者との提携の産物である。第 2、3 期の P.O. 発行と、印刷所経営は、若い知識人グループの資金援助によるものであり、新聞編集も彼らが中心となる。反軍国主義、ドレフェス擁護の闘争で役割を果たすが、アルマーヌ派の活動家と新聞編集をめぐって対立する。アルマーヌにおける社會主義と共和主義、労働者主義と知識人重視の葛藤が、強烈な個性によって統合されていたことが示される。

はじめに

1891年に結成された革命的社会主義労働者党の領袖J. アルマーヌは、19世紀末から20世紀初頭フランスの労働運動において、大きな位置を占め、重要な役割を果たした。この時期の労働運動史研究で彼について言及しないものはなく、個人についての研究も積み上げられている。しかし、なおその全体像が描き尽くされているとはいえず、とりわけ、彼の労働運動活動家歴の出発点ともいべきフランス書籍労連内での活動の解明は残された課題である。1884年から1920年までの長きにわたって書籍労連のトップである常任書記を続け、CGT内において改良派の指導者として重きをなした、A. クーフエについて研究を継続してきた我々にとって、最大の問題の一つは、書籍労連におけるアルマーヌとクーフエの関係である。最終的には1889年にアルマーヌが書籍労連から手を引くことでクーフエの指導権が確立することになり、この過程の検討は、アルマーヌの全体像を完成することにも貢献すると確信する。本稿は、これまでのJ. アルマーヌ研究を概括することによって、その準備作業を行う。

Ⅰ 日本におけるJ. アルマーヌ像

1970年前後に、日本において、革命的サンディカリズムに関心が高まり、それとのかかわりで、アルマーヌにも注目が集まった。代表的なものとして、谷川稔、相良匡俊が異なる観点からはあるが、まとまった叙述を与えている。谷川は、「アルマニズムとサンディカリズム」¹⁾において、主には革命的社会主義労働者党(POSR)について述べながら、アルマーヌに言及している。彼によると、POSRは、「あらゆる権威主義的社会主義の対極に位置し、きわめて分権化された組織を志向する党派であった」²⁾。あるいは、「POSRの成立は、いわば労働者主義ともいべき心性の結実であり、それはまた、多少とも閉鎖的な反インテリ感情を共有する職人や熟練労働者の世界に根差した習俗の反映であった」³⁾。POSRを反権威主義、労働者主義によって特徴づけるのである。アルマーヌについては、POSRの主要活動家をなす元コミューナルの一人であるとし、「印刷工組合創設者」を含む簡単な経歴を紹介したのち、「アルマーヌはフランス社会主義労働者連合における一方の旗頭としてブルースらインテリ指導者に対抗する労働者フラクションの先頭にあった」とする⁴⁾。すなわち、アルマーヌは、パリ・コ

1) 谷川稔『フランス社会運動史』1983年 第5章 参照。

2) 谷川 前掲書 179ページ

3) 前掲書 182ページ

4) 前掲書 177～178ページ

ンミューンの流れをくむ POSR の労働者主義、反インテリ・反権威主義を体現する者とみなされる。ただし、両者の関係について、「POSR はアルマニストという異名が一見想起させるところの、アルマヌをカリスマ的指導者と仰ぐ集権的な党ではなかった」ことが強調される⁵⁾。POSR、アルマヌについて、1つの明確なイメージを打ち出したと言える。しかし、アルマヌ自身の思想、考え方、その全体像には関心が向けられていない。それは谷川の課題ではなかったとしても、上記の POSR との関係と言うには、今少し、突っ込んだ考察が必要であったと考える⁶⁾。

相良は、アルマヌ派、アルマヌ個人に関してかなり性格の異なる叙述を与えている。その前提とされていたのは、当時の運動にあって思想は重視しえないことであった。すなわち、当時、「人と人とを結びつけていたのは思想ではなく、体験や感情の共通性であった。人々は抽象化されたスローガンによってではなく素朴な感情で動き、かくてリーダーたちにとって必要だったのは行動、振舞い、そして人柄であり、思想がどうかは、二の次であった」⁷⁾。また、「今日、反議会主義的傾向のものと解釈される「ゼネ・スト」と議会主義的路線を示す「権力の制服」、さらにブランキ派のスローガン「人民による直接立法」が多くの社会主義者の間で黒白平等に使われていたのである」と⁸⁾。さらに、全体として、革命派と改良派をはっきり分けることはできないとする⁹⁾。もちろん各党派の違いを無視してよいとするのではないが、その程度を含め具体的に見るべきことを強調する。アルマニスト、POSR に即して言えば、綱領で結集するというよりは、アルマヌに体現される労働者主義や反権威主義的気分によってまとまっていたと考えるのである。ここには、反権威主義でありながら、なぜアルマニストと呼ばれ続けたのかに対する1つの答が与えられている。これとかかわって、アルマヌの個性についての把握も興味深い。次の叙述はアルマヌが主義主張の人というよりは行動の人であったことをよく表している。「アルマヌが気楽にやってきて「直接立法制」、人民が議会を通すことなく直接に法案を提起し、採択するシステムのことを馬鹿話を混ぜながら、えらく勢いよく喋った」¹⁰⁾。さらに、「この党派の指導者アルマヌは印刷工の出身で、この頃、自分の

5) 前掲書 179 ページ

6) 両者の関係についての谷川の指摘を認めるとしても、なぜアルマニストと呼ばれ続けたのかとの疑問が生ぜざるを得ない。また、POSR の特徴が「労働者主義、反インテリ・反権威主義」とされるが、一政治党派の核心としては脆弱なのではないかと考える。

7) 「フランス左翼出版物の系譜——1880 年—1930 年——」相良匡俊『社会運動の人々——転換期パリを生きる』2014 年 74 ページ。

8) 「社会運動史の方法のために——革命的サンディカリズム研究の回顧」相良 前掲書 122 ページ。

9) 前掲書 154 ページ。

10) 「1890 年代のフランス社会主義運動——第 6 区革命的社會主義者連合——」相良 前掲書 230 ページ。

印刷工場をもっていた。彼は自分の新聞をもち、自分の著書を刊行し、仲間の原稿を出版することもでき、それが彼をして一党派の領袖たらしめた由縁でもあった。だが、またそのゆえに彼は仲間から憎まれもした」¹¹⁾ と。しかし、相良にあって、アルマヌスその人、アルマヌとアルマニスト関係の全体像が提示されるわけではない。

II J. アルマヌスの人物像

以上、日本における J. アルマヌス像は、谷川の場合、あくまでも革命的労働組合運動の源流として、相良の場合も、個性認識は若干強いとはいえ、やはり、ゼネ・ストに向かう、ゼネ・ストを担う人々の中にアルマヌスを置くものである。一言で言えばコミューナルから POSR の領袖としてのアルマヌスであり、当時の労働運動におけるアルマヌスに大きな位置が与えられているにも関わらず、人物像の全体は出てこない、あるいは問題にされていない。彼らが、依拠していたフランスにおけるアルマヌスについての通説を検討しよう。

まず、J. メトロン編『フランス労働運動活動家辞典』¹²⁾ を見てみよう。冒頭要約は以下のとおりである。「1843 年 8 月 25 日誕生（略）。1935 年 6 月 6 日死亡。帝政下の共和主義者。ニュー・カレドニアに流刑されたコンミューン戦士。生まれつつあったフランス労働運動の一傾向にその名を記した。運動の統一に長く従事し、1920 年に離れた」。全文から年表を作成した。大きく分けて、出生から、植字工となり、植字工組合で活動する第 1 期、コンミューへの参加から 9 年間にわたる流刑の第 2 期、労働党加盟と革命的社会主義労働者党の領袖として活動した第 3 期、それ以降の第 4 期に分けることができる。

アルマヌス年表

1843 年 オート・ガロンヌ県ソーヴテールで誕生
10 歳まで村の小学校に通う
1853 年 10 歳 パリ移住
1861 年 18 歳 植字工組合員
1862 年 パリ植字工の大ストライキに参加、投獄
1870 年 59 大隊の第 11 中隊、後、第 4 中隊伍長

11) 「フランス左翼出版物の系譜——1880 年—1930 年——」相良 前掲書 230 ページ。

12) Jean Maitron, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*, 10, 1973, pp.130-134. 2 列組で、通常の書物とすると本文は 7 ページ分ぐらいにはなるが、短いものであり、以下出所は省略する。

革命的社会主義労働者党指導者 J. アルマーヌについて——
「フランス書籍労連における J. アルマーヌ」のための準備的考察——

1871 年 3 月 モンマルトル大砲事件 5 月 28 日 逮捕
1872 年 軍事法廷 終身懲役刑 ツーロン
1873 年 ニュー・カレドニア流刑
1880 年 特赦 1879 年設立の労働党に参加 1 印刷所で組版工
1881 年 パリ市議会議員選挙落選 (1887 年、1890 年、1896 年 同様)
1882 年 労働党サン・テエティエンヌ大会
1885 年 クロワッサンの大印刷所で組版工※
1888 年 人権協会書記 日刊紙パルティ・ウーヴリエ創刊
1890 年 労働党シャテルロー大会 (ブルース派とアルマーヌ派に分裂)
1891 年 革命的社会主义労働者党 (通称アルマニスト) 設立大会
1895 年 C.G.T. 設立リモージュ大会参加
1896 年 インターナショナル・ロンドン大会
1900 年 第 2 回フランス社会主義者組織大会
ゼネ・スト動議にブリアン、ジョレスとともに署名
1901 年 下院議員補欠選挙 当選 (1902 年落選)
1902 年 フランス社会党トゥール大会参加
1904.5 年 インターナショナル アムステルダム大会参加
1906 年 下院議員選挙当選 (1910 年落選)
1911 年 新党を支援 短命に終わる
第 1 次大戦 社会党の国民擁護を支持
※この年に、「サン・ソヴール街で小印刷所設立、その後長期にわたって経営」とあるが、後に見るように、S. レイノルは、1889 年としており、我々が、Réveil typographique 紙で確認できるのも同様である

第 1 期についての叙述は簡潔である。父親が居酒屋を経営していたが、それもうまく行かず、パリに出てこざるをえない貧しい家庭に育ち、植字工となったこと、早くから組合に入り積極的に活動したことを確認しておこう。

第 2 期、コンミュンでの活動と流刑には最も多くの叙述が充てられている。名前を上げた 1871 年の大砲事件や、各地での演説、「いつも「赤い帯を締め、小銃を負い革に、ピストルを帯に提げていた」」との叙述は、機敏な、演説家アルマーヌの人柄を示す。とくに重視されるのは、軍事裁判所での弁明である。アルマーヌは、「政府への攻撃に参加し、不当な逮捕を行

い、バリケードを築いた」ことで、終身懲役刑の判決を下された。それに対して、「とるべき行動は唯一、脅かされている我々の諸制度、唯一の合法的政府、共和国を守ること」と弁明したことが指摘される。また、流刑にかかわっては、家族による刑の軽減要求に対して、「アルマヌが共和国大統領の人徳に訴えることをいつも拒否した」ことから、実現されなかったとされる。こうして、不屈の精神を持ったコンミュン戦士としてのアルマヌ像が打ち出される。

1880年の特赦後は、植字工の仕事に復帰したのちに、労働党に加わる。「フランス社会主義労働者連盟と、そのパリ地方中央連盟で最も目立った活動家の一人」であり、1882年には、ゲーディストの教条主義、中央集権主義に反対した。1888年になると、「彼は反ブーランジェ主義の闘いの推進者であり」、「人権協会の設立に際しては、書記となり」、「新聞パルティ・ウーヴリエの編集者として参加した」とされる。次いで、労働党の分裂に際して、「直ちにアルマヌは、ポール・ブルースの周りに結集する議員や知識人の傾向に抗する、活動家や手の労働者のリーダーとなった。彼と仲間、ブルース派を、悪しき妥協に導く純粋に議会主義的な活動のために、革命的闘争をなおざりにするとして非難した」と、革命的社會主義労働者党結成の中心になったことが指摘される。

アルマヌとこの党に関する、次の叙述は興味深い。「アルマヌはどんな特権的役職にも就かず、きわめてつまらないものであっても、あらゆる仕事を引き受けたが、彼がそれを体現していたので、この党はジャン・アルマヌの党であった」と。また、「アルマヌを動かした階級の厳しい感覚、労働者唯一主義、政治家への不信は、弁護士、知識人、長としてふるまうすべての人々、社会主義的民主主義を利用する傾向のある賢い指導者たちに対する猜疑心をもたらし」と。

これ以降、アルマヌは社会主義者の統一に向けて役割を果たしながら、度々、市会議員、下院議員に立候補する。それぞれ4回立候補し、市議会では当選することはなかったが、下院では1902年、1906年に当選し、5年間在籍した。「彼は議員になることに貪欲ではなく、選挙活動に大きな期待を持っていなかった。しかし、彼はよき旗手であり、その役割を引き受けた。コンミュンと流刑地の栄光と、よく響く演説は民衆との結びつきを確かなものにした」とされる。

最後に、アルマヌの人となりを理解するうえで見落とせない以下の叙述を紹介しておこう。「アルマヌは蛮人でもなく、無知な人でもなかった。職業でのように自学、自習の人であり、決して学ぶことを辞めなかった」。「彼はまた、確信的で、活動的な自由思想家であり、組織された自由思想のプロレタリアの多数が、彼の素性や、確信に応えた」。

以上、メトロン辞典は、アルマヌの人柄、思想について、簡潔ではあるが、明確な全体像を提示すると言える。同時に、それはいくつかの問題も提起する。まず、コンミュン、反ブーランジストの闘いでは「共和国擁護」が中心課題であり、アルマヌは共和主義者として闘いの先頭に立った。彼の中で社会主義と共和主義はいかなる関係にあったのか。また、反権威主義でありながらアルマニストと呼ばれ続けたのはなぜか。これらを念頭に置き、同時代の資料 Flax, Jean Allemane, *Les Hommes du Jour* 1908.¹³⁾ を見よう。

冒頭で、アルマヌが、「行動の人」であり、「どんな理論的著作も残さず」、「演説家としても、綱領的言説を述べず」、「その容貌をはっきりさせるのは極めて難しい」とされる。しかし、彼が体現した理念、アルマヌ主義が存在するとして、労働者大衆による階級闘争を通じた革命、議会活動を革命的行動に従属させることがあげられる。同時代人にとってもアルマヌの考え、アルマヌとアルマニストの関係が不明確とされていたことに注目すべきである。

アルマヌの人柄にかかわる叙述を見よう。コンミュン以前、若い時から、積極的な植字工組合員であったことは、メトロン辞典と共通であるが、2 か月間の投獄とかかわった次の叙述は注目される。すなわち、「そこで省察し、はっきりとプロレタリアの運命がどんなものか、それにどのような行動で献身すべきかを知った。共和主義者から社会主義者になった」と。また、コンミュンにおいても、「彼はすでに、社会主義者 - 共産主義者のスポークスマンであった」と、アルマヌが漠然とはしていても、早くから社会主義の確固たる自覚を持っていたとされるのである。

流刑からの特赦以来、ブーランジストの時期には、第一線で戦い、小さくない役割を果たし、「彼は、共和国を守るのに最も貢献した人の中に数えられる」とされる。また、「彼の新聞パルティ・ウーヴリエで、ゼネラルストライキを煽り続けた」と。さらに、年老いてからも、「毎年、徴兵が始まるときに、パリの様々な地区で集会が持たれる時に、私は、アルマヌが軍国主義への憎しみ、そして近づく革命への期待を断言するのを聞く」と。著者が意図していたかは別として、ここからは、彼が社会主義者であるとともに熱烈な共和主義者であったことが見て取れる。

この短い記事は、次の叙述で結ばれている。「彼は、街頭と行動の人である」、「理論家でも、学派の長でもなく、単に、民衆の息子、労働者の息子、労働者そのものである」と。アルマヌは、労働者として、労働者のために闘ったのである。

13) 本資料も2列組2ページ1/3、通常の書物で5ページ分ほどであり、以下、出所ページは省略する。なお、本記事には A.Delannoy のデッサンがつけられている。この記事の著者 Flax については詳細不明であるが、発行時点において革命主義を標榜していたエルベ主義の立場から書かれており、すでに、忘れ去られようとしていたアルマヌの革命主義的伝統を評価しようとするものである。

次に、M. レベリユウが書籍労連について書物の中で、アルマヌに与えているコラムから、注目すべき指摘を見よう¹⁴⁾。まず、アルマヌは書籍労連、パリ植字工組合において、「党と組合を緊密に結合させたのち、この結晶化が完成しなかった時、彼は、1888年から組合の活動家を辞め、共和制擁護と反軍国主義による反ブーランジストの闘いに専念する。この年に自分の新聞パルティ・ウーヴリエを発行し、また、活動家の多くのグループとかかわりを持つ小さな印刷所を購入する。この時から組合にとどまりながらも作業場の仲間ではなかった」と。これは、アルマヌの「労働者主義」の内容について大きな問題を提起している。反ブーランジズムの闘い、革命的社会主義労働者党の活動を重視したことは、アルマヌの政治的センスを示すものであり、直ちに労働者主義に反するものではない。しかし、労働組合での活動よりもそちらに力点を置いた事実は無視しえない。印刷所の購入についても同様であり、印刷所経営を組合活動よりも重視したのであり、レベリユウは「作業場の仲間でなかった」と言い切るのである。

さらに、レベリユウは次のように言う。「1889年から、アルマヌの人生は、植字工組合にはかかわらなかった。ポシビリスト党の分裂後は、心ならずも革命的社会主義労働者党、いわゆるアルマニストの旗頭となる。・・・(のち)代議士にもなったが、気兼ねなくというわけではなかった」と。アルマヌの労働者主義、アルマニストとの関係、議会主義との関係について分析はされていないが、問題提起として受け止めるべきである。

III アルマヌの労働者主義、共和主義と社会主義

以上の検討から、アルマヌの労働者主義の内容、共和主義と社会主義の関係は、触れられることはあったとしても、十分に検討されてこなかったと言える。というよりも、当然視され、問題とされてこなかったのである。M.Winock と S.Reynolds は、ここに光を当て、通説を批判しようとした¹⁵⁾。

ウィノックの課題は、十分に理解されてこなかったシャテルロー大会における労働党分裂の

14) Madeleine Rebérioux, *Les ouvriers du livre et leur fédération. Une centenaire 1881-1981*, 1981.p.101. また、ニュー・カレドニア流刑に関して、写真付きの小コラムも設けている。Cf.op.cit.p.90. 書籍労連、植字工組合内におけるアルマヌの動向については別稿で検討する。

15) Michel Winock, *La scission de Chatellerault et la naissance du parti "allemaniste" (1890-1891)*. *Le Mouvement social*. N.75. avril-juin 1971. Sian Reynolds, *Allemane Avant l'allemanisme: jeunesse d'un militant (1843-1880)*. *Le Mouvement social*. N.126. janvier-mars 1984. Allemane, the Allemanists and *Le Parti Ouvrier: the Problems of a Socialist Newspaper 1888-1900*. *European History Quarterly* Volume15 Number 1 January 1985.

解明にあり、それは、イデオロギー的争い、個人的争いではなく、主に議会主義をめぐる組織問題での対立によるものとする¹⁶⁾。一般的な議会、選挙をめぐるアルマニストの方針、ブルース派との対立点に関しては、谷川、メトロソ辞典の指摘と重なるので省略する。注目されるのは、対立がブーランジストとの闘争の中で出てきたこと、そこにアルマースの「労働者主義」、社会主義と共和主義の関連を解明する手掛かりが見出せることである。

当時アルマースが属していた労働党（ポシビリスト）は、反ブーランジスト闘争の先頭に立った。「他の社会主義者の期待や、同意にも反して、ポシビリストのもっとも確信的活動家は共和国の防衛を第一義とした」¹⁷⁾。アルマースはその中心にいた。「革命主義的傾向のもっとも支持者の多い弁舌家 J. アルマースその人は次のように述べた。すべての共和主義的フラクションに属する人々は、経済的政治的争いは後に回して、休戦しなければならず、ビザンツ人の軽率さをまねてはならない。共和国を見張ろう」¹⁸⁾と。「アルマースは、ご都合主義者の共和国に対してどのような不満が醸成されようと、共和国が、国家の共和主義的形態がすべての専制的試みから身を守るものであると信じていた」¹⁹⁾と。急進派との提携にも大きな役割を果たした。労働党の中心人物ジョフランの証言として、「私のところに来て、ブーランジェに反対して急進派、進歩党と一緒に進む可能性を話したのはアルマースである」²⁰⁾。ここには、アルマースが、コンミュンでの戦い、流刑の経験の中で培った強い共和主義的信念を持っていたことが示される。

反ブーランジストの闘争は、まず、アルマースとブルースを近づけた。ウィノックによると、アルマースとその友人たちが、「人民の友」紙と別れて「パルティ・ウーヴリエ」を創刊したとき²¹⁾、ブルースと彼は近づいていた。二人は共に、反ブーランジスト宣伝全国中央委員会に属し、また、急進派と幾人かのご都合主義者とともに、人権協会の設立の際、二人は委員会に参加した²²⁾。しかも、それは、下部の党員たちとの対立も辞さないものであった点で注目すべきである。ウィノックは以下のように言う。労働党のこの方針転換は、多くの活動家を不安にさせた。彼らの労働の場、労働組合においては、経営者との接近は厳しく判断された。

16) ウィノックは次のように言う。この分裂は、いつも十分には理解されてこなかった。例えば、G. ルフランは、イデオロギー的対立よりも、世代、教育、気質のぶつかりなどの性格的な対立に帰着させている。しかし、分裂の2巨頭、ブルースとアルマースは全く同世代である。1890年の分裂は、イデオロギー的ではなく、個人的争いではなく、組織問題である。M.Winock, op.cit.p.32.

17) Op.cit.p.53.

18) Op.cit.p.54.

19) Ibid.

20) Ibid.

21) この新聞発行はアルマースの生涯にとって決定的事件の1つである。詳細はS.Reynoldsが検討している。

22) Op.cit.p.54.

ブルースは、政府を弱めることでブーランジストの運動を利することになるストライキを、しばしばブーランジストと非難した。党の聴衆は労働者階級の中で減少していった。アルマヌスは、ゲーディスト、ブランキスト、独立派を、ブーランジストの事件と、人権協会を利用して、党に分裂の種をまき、その宣伝を困難にさせたと非難した。7月末に、党の総会は労働党のメンバーの人権協会からの離脱を決定した。その時以来、アルマヌとブルースの政策は極めて評判が悪くなった²³⁾。したがって、まず、あらためて、アルマヌの共和主義的信念は下部の党员、労働組合員の気分、感情と対立してでも貫かれねばならないものであったことを確認しよう。

しかし、ブーランジストとの闘いの勝利が、労働党の二つの傾向、アルマヌとブルースの対立を露にすることになった。すなわち、ブルースらは急進派との連携によって獲得した議席を守るために、この提携を続けようとし、アルマヌは革命的路線に戻ろうとした。諸事件の連続は、いよいよアルマヌとブルースを引き離した。後者は急進派との接近政策に忠実にとどまったが、アルマヌは、土木労働者のストライキを擁護し、労働運動と切り離されることを拒み、反ブーランジズムにとどまりながら、社会闘争についての論説を増やした²⁴⁾。1890年の市議会議員選挙の際に分裂は深まった。一方は、労働の場、とりわけ労働組合で失ったものの回復を第一とし、すべてのブルジョワ政党に対する革命的目的を明言した。他方は、議員に支持され、ブーランジストとの闘いが下部の活動家に一時的に認めさせた選挙戦術を、選挙、市議会で継続しようとした²⁵⁾。

これ自体は、これまでの検討とも符合することではあるが、見落とせないのは、アルマヌの、社会主義と共和主義を両立させる苦心、努力が指摘されることである。「彼にとって社会主義の闘争の要求に応えながら、共和国を守るために戦うことは厳しいジレンマであった」²⁶⁾。アルマヌは、以下のようにその統一を図ろうとしたとされる。「ブーランジズムは民衆、労働者階級をいよいよ締め付ける困難から生じた。この災厄をもたらしたのは、ナポレオン伝説ではありません、ブルジョワ共和主義の諸君。あなた方の金銭欲、支配欲、社会主義への憎しみからです」と²⁷⁾。

23) Cf.op.cit.p.55.

24) Cf.op.cit.p.56.

25) Cf.op.cit.p.57. アルマヌの反議会主義は、普通選挙に対する不信心にも支えられていた。「議員たちの普通選挙に対する過大な好みに反対。普通選挙は、その変わり身が、ボナパルトを権力に就け、コンミュンを断罪し、ブーランジェに台石を与えた」と。op.cit.p.42. 一種のエリート主義が見られ、これも、アルマヌを単純な労働者主義とは見做せないことを示唆している。

26) Op.cit.p.54.

27) Op.cit.p.55.

ウィノックは、アルマースの人となり、次のように総括する。「アルマースが最終的には、ブルースよりも仲間の間で人気を獲得したとするなら、それは、彼が、よりうまく革命的活動家の資質を代表したからである。旧コンミュン戦士、ニュー・カレドニア流刑、さらに、本当の労働者であった。激しく、情熱的で、闘争的、プーランジストの危機の際に見られた政治的センス。・・・彼の敵ブルースは、活動家の目には、ブルジョワの出身、知識人、博士と見えた。彼の選挙での成功、市議会副議長への上昇は損をさせた」²⁸⁾ と。アルマースの労働者主義と呼ばれてきたものが簡潔にとらえられている。しかし、ウィノックはこの点でも留保を忘れない。「しばしば、アルマニズムの特徴の一つが労働者主義とされる。もちろん、ニュアンスはある。もっとも輝かしいアルマニストである L. エルは、知識人、階級から離れたブルジョワと疑われていた」²⁹⁾ と。

次に、S. レイノルの2つの論文を紹介し、検討しよう。アルマニスト以前のアルマースを扱うものと、アルマースと機関紙「パルティ・ウーヴリエ」を扱うものである。前者はアルマースの共和主義と社会主義の関係についてのこれまでの検討を補足するものであり、後者は、アルマースと知識人との関係、したがって、彼の労働者主義についての興味深い考察である。

レイノルが、「アルマニスト以前のアルマース」³⁰⁾ で強調するのは、アルマースの労働者性と強固な共和主義である。引用しよう。「彼は職の労働者であった。すべての同時代人は彼が、植字工であることを知っていた。ゲード、ラファルグ、ヴェラン、ブルース、ジョレス、ミルランなどこの世紀末の社会主義の指導者の中で、唯一、労働者階級であると宣言しうる人であった」³¹⁾。「彼は、パリの植字労働者の典型であり、職人と芸術家の間に身を置く、少し猛々しい良き息子であった。彼はコンミュン以前、植字工であり、フランスに戻って以降もいつもそうであった」³²⁾。そして、人一倍積極的で、頑固な性格であった。若い時にストライキに参加して逮捕され、「判事は寛大さで臨んだが、アルマースは悔悛せず、二度召喚され、二度放免されたのちに投獄を命ぜられた」。印刷所を締め出され、「あらゆる仕事、掃除夫、荷揚げ人足、的屋をし、橋の下で寝る」ことがあっても屈しなかった³³⁾。組合の進歩的な核を形成し、革命的グループを形成しようとした³⁴⁾。ただし、次の指摘、「世紀末の社会主義の他

28) Op.cit.p.51.

29) Ibid.

30) 出生、パリ移住後の家族、徒弟修業と書籍労働者組合での活動、パリ・コンミュンと流刑についてのレイノルの緻密な実証研究は、高く評価されるべきである。とりわけ、流刑地からの手紙の分析は、アルマースの人格に迫り興味深い。Cf. S.Reynols, *Allemane Avant l'allemanisme*.op.cit.

31) Op.cit. p.4.

32) Op.cit.p.26.

33) Op.cit.p.9.

34) Cf.op.cit. p.11.

のすべてのリーダーと異なり、労働者教育に重要性を与えた」³⁵⁾は、流刑地から甥や、息子に宛てた手紙で、学ぶことを繰り返し強調していることと合わせて、アルマヌスが決して反知識主義ではなかったことを示している³⁶⁾。

共和主義者としてのアルマヌスについて。「情熱的な共和主義、囚われの身の彼の手紙を読んだ後では、ブーランジスムの敵、最初のドレフュス派の彼をよりよく理解できる」³⁷⁾。「若い時には、彼のペンには社会主義の言葉は出てこない。若い時から、プルドンやフーリエを読んではいたが、彼を、1880年の帰国まで特徴づけたのは、むしろ、パリ植字工の組合主義であり、80年代活動家のジャコバン主義であった」³⁸⁾。アルマヌスの社会主義と共和主義は次のように結論される。「アルマヌスは、実際、彼の後半生において、直感の社会主義者になる。若い時に共和主義者であり、コンミュン戦士であったように」³⁹⁾。

「アルマヌス、アルマニストとパルティ・ウーヴリエ」を検討しよう。レイノルによると「パルティ・ウーヴリエ」紙は、3回その発行形態を変えており、それに従って、3期に分けて考察されている。以下の検討の便宜のために同紙にかかわる年表を掲げる。

パルティ・ウーヴリエ紙年表

- 1878年 「プロレテール」(週刊)創刊
- 1883年 「人民の声」創刊
 - 「プロレテール」を「プロレタリアート」に転換
- 1884年 4月～10月 アルマヌス「プロレタリアート」経営
- 1887年 「人民の声」ポシビリストの手に
- 1888年 4月ポシビリスト「人民の声」退去
 - 「パルティ・ウーヴリエ」創刊 第1シリーズ
- 1889年 1月 ブーランジスト バリの選挙で頂点 直後に失墜
 - アルマヌス印刷所設立
- 1890年 1月 「パルティ・ウーヴリエ」停止

35) Ibid.

36) 「この時代の彼の活動については断片的にしか情報がないが、書籍労連での彼の活動の特徴づけることになる真面目でエネルギーな関わり、あまり抑制されない性急さ、分裂志向気質を示している」。Ibid. これは、アルマヌスの人となりに迫るものである。

37) Op.cit.p.26.

38) Ibid.

39) Ibid.

1890 年 5 月 日刊「パルティ・ウーヴリエ」第 2 シリーズ
10 月 C シャテルロー大会 アルマニスト分離
11 月 「パルティ・ウーヴリエ」週刊化 第 3 シリーズ
1893 年 人民の直接立法キャンペーン
1894 年 反軍国主義キャンペーン
1894 年 12 月 24 日シャルネー反軍国主義論説
1897 年 ドレフュス擁護キャンペーン

起源と第 1 期 「パルティ・ウーヴリエ」1888～1890 年

フランスにおいて社会主義政党が生まれつつあった 1880 年当時、宣伝は主に演説によっていたが、新聞も重視し始められ、「すべての党は少なくとも週刊紙を持とうとしていた」。しかし、労働者は新聞を定期購読せず、販売部数も少なく宣伝も見込めず、印刷所の確保もむずかしかった。資金不足が原因で、これらの新聞の生存はつかの間、あるいは不規則なもので、一回限りか、週刊であり、日刊紙はほとんど不可能であった。結局、パリでは、1883 年 J. ヴァール創刊による、日刊紙「人民の声」が唯一社会主義的で大衆的であり、すべての社会主義思想に開かれており、時には 60,000 部を数えた。同紙はヴァールの死後、1885 年から 1887 年 1 月まではゲード派が支配し、その後ポシビリストのチームに置き換わった。1887 年のパリ市議会選挙でポシビリスト 9 人の当選に貢献したが、その後の内紛で、彼らは 1888 年 4 月に出てゆくことになった⁴⁰⁾。

ところで、フランス労働者社会主義者連盟は、1878 年創刊の週刊党機関紙プロレテールを持っていた。パリで確固たる読者を持ち、1882 年のゲーディストの分離以来、P. ブルースによって指導されたポシビリストと結びついた。1883 年に日刊紙へ転換されたが、6 月 10 日から 7 月 12 日までの運命で、週刊に立ち戻り、名称は「プロレタリアート」に変更された。アルマヌはこの新聞の立ち直りに深くかわかり、最初の 6 か月間、1884 年 4 月から 10 月、経営に携わった⁴¹⁾。

1888 年 4 月に発刊される「パルティ・ウーヴリエ」について、レイノルは、上に見られる日刊紙発行の困難さにもかかわらず、「日刊紙として 18 か月存続したのはどうしてであろうか」

40) S.Reynols, Allemane, the Allemanists and Le Parti Ouvrier:op.cit.pp.46-47. 反ブーランジストの論説が 1887 年、さらに 1888 年に「プロレタリアート」紙に現れた。ポシビリストが他の社会主義者と対立してまでも、反ブーランジズムの闘いに突き進んだことが、彼らが「人民の声」の編集部から離れた原因であった。Cf.op.cit.pp.47-48.

41) Cf.op.cit. p.47.

と問い、「答えは、1888年4月に頂点を迎えたブーランジストの危機にある」とする⁴²⁾。後に、労働党ポシビリストがブルース派とアルマース派に分裂し、パルティ・ウーヴリエ紙はアルマース派の機関紙とみなされるようになるが、ウィノックも指摘するように、当時はまだ分裂の危機には至っておらず、党機関紙「プロレタリアート」も存在した。あえて、アルマースが日刊紙を発行した、また発行しえたのはなぜか。レイノルはこれまで立てられなかったこの問題を提起するのである。

「パルティ・ウーヴリエ」紙は、アルマースが中心となったポシビリストと急進派との提携の産物であった。1888年までに急進派は国中を覆ったブーランジスムの波に大いに苦しめられていた。共和国の防衛のためのキャンペーンは、ポシビリスト社会主義者に彼らを近づけた⁴³⁾。それを橋渡ししたのが、新聞貴族と呼ばれる V. シモンであった。彼は、「1885年に40,000部を数えた」「ラディカル」紙を所有し、さらに、公にはされていないが、いま一つの急進派新聞である「ナシオン」紙も彼の手にあった。シモンのような急進派シンパにとって、ブーランジスム反対の兆候を示し始めたパリの労働者階級に近づく道は、労働者階級の一セクションに忠誠を誓う人々によって出されている日刊紙を金銭的に援助することであった⁴⁴⁾。「パルティ・ウーヴリエ」紙の金銭的支持者が一個人、急進派とのコネクションを持つ V. シモンであったことは当時の人々には、とくに警察には全く秘密ではなかった⁴⁵⁾。

次いで、V. シモンとアルマースの関係が明らかにされる。「人民の声」紙から離れたポシビリストのジャーナリストで、シモンが最も近かったのは、彼の植字室で働いていたアルマースであった⁴⁶⁾。パルティ・ウーヴリエ紙の出発の文脈の中で、彼の職業は金銭的援助者とのリンクを提供した。どのような駆け引きがアルマース、シモン、ポシビリスト党のリーダー（彼らがかかわっていたとして）の間でなされたのかは正確にはわからないが、はっきりしているのはこの新聞は、最初から「ラディカル」と同じ部屋で印刷されたことである⁴⁷⁾。

出発したパルティ・ウーヴリエ紙の内容は、アルマースが社会主義を目指しながらも、その

42) Cf. *ibid.*

43) *Op. cit.* pp. 48-49. 初めて、一社会主義政党がブルジョワ政治家との公の同盟関係に入ったのである。人権協会の背後でのもっとも活動的な三人は、V. シモン、A. ランク（旧コンミュン戦士で、ガンベッタ主義者）、そして J. アルマースであった。Cf. *op. cit.* p. 49.

44) *Ibid.*

45) *Op. cit.* p. 48. 不適切な資金からお金を受け取っていたとの非難は、パルティ・ウーヴリエ紙の存続を通じた絶えざる特徴であった。レイノルは、内務省、パナマ会社、フリー・メイソンというこれまで指摘されてきた資金源について丁寧に検討している。Cf. *op. cit.* p. 50

46) *Op. cit.* p. 49.

47) *Ibid.* アルマースの印刷業のキャリアは歴史家によってほとんど見過ごされてきた。それが、さもなくば、パズルのようであり、矛盾している彼の政治的キャリアの多くの側面を説明するにもかかわらず。 *Ibid.*

前提としてどんな犠牲を払っても共和主義を守らねばならないと考えていたことを明らかにする。それは、彼の第二帝政との闘争、パリ・コンミュン、流刑の体験に根差していた。「最初の読者たちは、それが、階級闘争よりも反ブーランジスムキャンペーンに向けられていると考えていた」。「1871年のコンミュンの屠殺者としての將軍の役割を強調して労働者の読者に向けられた」。「アルマヌは、彼の世代の、非社会主義的な、第二帝政期の敵と共有する強い反ブーランジスムに動かされていた。それは、必ずしも若い党の活動家とは共有されていなかった」⁴⁸⁾。

1889年1月にパリの選挙で頂点を迎えたブーランジスムの運動は、ブーランジェが非合法の手段に訴えることを望まなかったことから、終止符を打たれた。シモンの資金援助が止まり、1890年1月に、第1期パルティ・ウーヴリエ紙は終わりを告げた。

第2期、第3期パルティ・ウーヴリエ アルマヌとアルマニスト

レイノルは、「パルティ・ウーヴリエ」紙の2期、3期を分けて叙述しているが、内容的には共通してアルマヌとアルマニストの関係の分析であり、ここでは一括して扱う。

「パルティ・ウーヴリエ」の第2シリーズは1890年5月に、やはり日刊として始まり、その存在は、10月のシャテルロー大会までのアルマニストの分離の最高潮の時期と一致していた。1890年11月以降、週刊、時には隔週刊になり、第3シリーズとされる⁴⁹⁾。

アルマヌは1889年に、小さな印刷所を設立した⁵⁰⁾。ただし、「パルティ・ウーヴリエ」の最初のシリーズは、ずっとアルマヌによってではなく、ラディカル紙の印刷所で刷られており、最初の顧客の一つは、党の週間機関紙「プロレタリアート」であった。アルマヌの印刷所の資金は、最初は日刊新聞の印刷には足りなかった。しかし、1890年に「パルティ・ウーヴリエ」の第2シリーズが出たときには、アルマヌの印刷所で刷られ、アルマヌは党の新聞を独占的に印刷することになる。この時資金はどこから、何のために出たのか。アルマヌの印刷所は小さく、不安定なヴェンチャー企業であり、彼自身にはその資金はなかった。いくらかは、「プロレタリアート」紙上での広告で見られたように、党のメンバーの分担金の形で

48) Op.cit.p.51.

49) Op.cit. p.54. レイノルは、分裂の過程はウィノックによって明らかにされたが、アルマヌとアルマニストの関係がまだであるとする。「パルティ・ウーヴリエ」の綿密な調査は、アルマヌの党内における矛盾した、孤立した位置に光を当てるであろう。Ibid.

50) Ibid. レイノルは詳細な時期を明確にしていないが、パリ植字工組合内のアルマヌ派の機関紙 Réveil Typographique によると遅くとも5月初めである。レイノルは、「これは、パリの政治的サークルにおけるアルマヌの名声を増大させるが、幾人かの印刷工組合員を遠ざけることになった」とする。Ibid. アルマヌが、この印刷所経営をめぐって、植字工組合のアルマヌ派と対立することについては、別稿で検討する。

得られた。しかし、ここでも資金提供者がおり、それは若い知識人の1グループであった。レイノルは、証拠はより不確実であり、「党の内部サークルにも厳しい秘密であった」が、得られた断片的情報から、28歳の著名な哲学・民俗学者L.マリリエ、その友人で高等師範学校の若いライブラリアンであるL.エル、関与がより不明ながらすでに帝政期に法律家であったL.サクレであるとする。エルとマリリエは熱心な反ブーランジストであり、それが、パリで最も有名な反ブーランジストに力を貸させることになったのである⁵¹⁾。

編集、執筆の中心もアルマヌと、上記3人であった。アルマヌは新聞製作に必要な資金を提供する若い知識人に編集責任をある程度任せていた。ひとたび編集に携わると、彼らの政策は、社会主義にかかわるより広い論説を提供することになった。マリリエの論説は、この新聞の読者である党員の知識を広げようと意図するものであり、一種のワンマン労働者教育協会であった。エルは、とりわけ、他の国の社会主義政党との比較に関心を持ち、彼の論説のトーンと性質は、普通の「パルティ・ウーヴリエ」の記事よりもアカデミックであった。彼の、選挙主義、フェビアン主義、漸進主義などの見解はアルマヌや、党の分裂を引き起こした怒れる活動家の考えよりも、P.ブルースの哲学に近かった⁵²⁾。しかし、ブーランジズムの危機の最終的消滅、労働党の分裂と両派の対立の激化は、マリリエを去らせ、エルも後景に退き、パルティ・ウーヴリエは週刊化を余儀なくされる⁵³⁾。

第3期、アルマヌに最も近しかったのは、L.サクレであり、数年間信頼のおける支援者であった。さらに、2人とも若い事務員であったE.ワンディ、H.ヴァシェが新聞に定期的に執筆した。1894年には、若い学生M.シャルネー、20歳の兵役を終えたばかりA.バラが加わった⁵⁴⁾。レイノルは、アルマヌが多数の秘蔵子をもち一種の父親となっているとの警察の報告はなにがしかの真実を伝えているとしたうえで、次のように言う。これらの若者は労働者階級の幹部とは異なっており、緩やかに知識人と言える人々によるアルマヌに忠誠なグループがあった。彼らは新聞と印刷所に集まり、党の委員会やグループからは疑いの目で見られていた。「パルティ・ウーヴリエ」は革命的社会主義労働者党の代弁者であるより、アルマニスト・フラクションのそれであったと⁵⁵⁾。

51) Op.cit.pp.55-56.

52) Op.cit.pp.57-58.

53) マリリエは7月末までは定期的に「パルティ・ウーヴリエ」に書いていたが、それ以降、彼のペンネームは永久に消える。彼は、社会主義サークルから離れ、アカデミックの仕事に戻る。エルはアルマニスト党に残る。ただし、地区(5区)の積極的メンバーとしてではなしに、学生サークルにエネルギーを向けた。L.サクレは、他の2人よりも、1890年の分裂をめぐる闘争に全面的にかかわった。Cf.op.cit.p.58.

54) Cf.op.cit.p.61.

55) Cf.op.cit.p.62.

「パルティ・ウーヴリエ」の主要なテーマは以下のとおりである。1893年には人民の直接立法に関する国際的議論ともかかわって、この年の春から、議会的スキャンダルへの攻撃と結び付けて、国民投票のためのエネルギーなキャンペーンを始めた。党のメンバーの共感を期待したが、得られず、失敗した⁵⁶⁾。1894年には、反軍国主義キャンペーンを積極的に行った。アナキストのテーマとみられた反軍国主義は、権力によって厳しく罰せられ、パルティ・ウーヴリエは多くの殉教者を生んだ。M. シャルネー、6か月の投獄。アルマヌ自身、常備軍反対の反軍国主義論説を出版した上で1か月の投獄と罰金、娘婿 A. モルランもアルマヌ不在中の編集と出版で同様の罰⁵⁷⁾。

最後に、ドレフュス事件。ドレフュス有罪に疑いを表明した最初との名誉を持つ、1894年12月24日のシャルネーの反軍国主義論説で先鞭をつけ、「パルティ・ウーヴリエ」チームは、他の社会主義者がためらっている時、1897年の事件の初期にあらためて問題を取り上げた。アルマヌはゲーディストをためらいで攻め続け、ブーランジストの時代を呼び戻した⁵⁸⁾。しかし、このキャンペーンも反ブーランジズムと同様の党内対立をもたらした。党の草の根活動家は、最初はゲーディストに従い、傍観者でいようとした。親ドレフュスの立場への敵対は、知識人、ブルジョワに強い不信を持つ、極端な労働主義者 P. ファベロに指導されていた。ファベロは億万長者のユダヤ人の将校の見方をするということで、親ドレフュス17人を党から除名するよう要求した⁵⁹⁾。

対立は、新聞の在り方をめぐって表面化することもあった。1890年12月2日アルマヌのもっとも厳しい敵対者が、タイトルに付随する不快な噂と、タイトルを保持することがアルマヌへの従属とみなされることを理由にタイトルを「階級闘争」に変更することを提案した。17日の集会で、タイトルは保持されたが、同時に、新しく選出された編集委による運営も決定され、1月上旬に党総会は新しい新聞を始める動議を提出した。アルマヌは強く反発し、パルティ・ウーヴリエに固執した。彼は今や新聞マネジメントの分野である種の熟練を獲得しており、それが彼の利点となり、計画されたライバル紙は日の目を見ず、新聞は週刊で生き残った⁶⁰⁾。

56) Cf.op.cit.p.63. この失敗の直接的結果は、多くのペンネームを含む、新聞編集委への不信の深まりであった。Cf. ibid.

57) Cf.op.cit. p.64. この反軍国主義宣伝は一般党員に人気があったが、イニシアティブはジャーナリストによるもので、パルティ・ウーヴリエのチームによる挑戦的精神でなされ、党の協力した行動によるものではなかった。Cf. ibid.

58) Cf.op.cit.p.65.

59) Cf. ibid.

60) Cf.op.cit.p.60.

レイノルは、革命的社会主義労働者党、アルマニスト内部の軋轢を指摘する。「1892年の夏に、警察が革命的社会主義労働者党のパリ連合の主要活動家をリストアップしようとしたときに、アルマヌスは全く言及されていない。そこに挙げられている名前はパルティ・ウーヴリエの論説の著者としては現れてこない」と。また、「1896年までには、内情に通じた人々は、党の本当の指導者は、表には出ない、規律を守る書記J.B. ラボーであると気付いていた。C. ブリュネリエールは1896年の手紙で、革命的社会主義労働者党をラボーディストの党と書いた」と⁶¹⁾。そして、次のように言う。「アルマヌスと最もアクティブな活動家との間の決定的違いは、彼がブルジョワ政治家を強く嫌ってはいたが、知識人に不信を持っていなかったことである。それ以上に、彼の生涯の多くのエピソードや、書いたものが示すように、彼は知識人を尊敬し、評価していた」と⁶²⁾。

しかし、レイノルは分裂を過大視するのも誤りであるという。「パルティ・ウーヴリエ」は、党の文献や大会報告、集会の掲示や党メンバーの演説を印刷し続けた。また、アルマヌスは主要演説家としてのキャリアを続け、社会主義者サミットに参加した。・・・そして、公式の代表ではないとしても、党のスポークスマンとみなし続けられていた」と⁶³⁾。

レイノルは、次のようにまとめる。「パルティ・ウーヴリエ」はその3つの時期に、異なるアイデンティティーをもった。いつの時代にも新聞を発行するグループが異なりながら、編集者、経営者、印刷者、時にはその3つを兼ねるアルマヌスとの密接な関係がある限りで統一されている。彼の周りで、人々のチームを変えながら。ある時は新聞貴族に、短期間、政治的動機で資金援助を受け、編集方針にかかわられ、また、ある時は、2人の、あるいはグループの理想主義的知識人のそれを受けたと⁶⁴⁾。

「パルティ・ウーヴリエ」は、部分的には、革命的社会主義労働者党、アルマニストの機関紙の性格をもちながらも、あくまでも、アルマヌス個人の新聞であり、その編集、経営も、第1期は、ブルジョワ急進派との提携に依拠し、第2、3期は、アルマヌスと彼を取り巻く若い知識人によるものであった。これを、詳細に解明したことはS.レイノルの成果である。同時に、この解明を通じて、アルマヌスにおける共和主義と社会主義、労働者主義と知識人重視の

61) Cf.op.cit.p.62.

62) Op.cit.p.59.

63) Op.cit.p.62. 次のような指摘も。ポシビリスト党において、2つの陣営間で緊張が高まっていた1890年の春と夏の間、指導部支持の記事が週刊紙「プロレタリアートに」に、指導部批判が日刊紙「パルティ・ウーヴリエ」に現れた。指導部、反指導部に対して、その立場が極めてあいまいであったアルマヌスは両方の新聞を印刷し続けた。Cf.op.cit.p.54-p.55. さらに、1892年にかんして、「党と全く関係のない折衷主義の出版を行い、もちろん党大会報告や、そのたのPOSRのための印刷をしていた」と。Cf.op.cit.p.61.

64) Cf.op.cit.pp.65-66.

葛藤、それを強烈な個性の中に統一したアルマヌの人間像を示すことに成功している。

おわりに

労働者主義を体現しながら、共和政擁護の闘いにも先頭を切った J. アルマヌは、19 世紀末から 20 世初頭にかけてのフランス労働運動における輝く星の 1 つである。その原点である、パリ植字工組合、フランス書籍連盟におけるアルマヌの活動を解明することが次の課題である。

About J. Allemane, the leader of Le Parti ouvrier socialiste révolutionnaire (POSR), his actions in La Fédération française des travailleurs du livre is not studied enough. By surveying the researchs on him, we will prepare our study.

In Japan, Allemane is regarded as anti-authority, anti-intellectual and standing by workers. But M. Rebérioux remarks that Allemane prefers POSR to the union of compositors and cares firstly about his printing shop.

M. Winock and S. Reynols studies deeply this question. Winock shows that Allemane allies with the radical bourgeois for the movement against the Boulangist and this alliance causes the negative reaction of the members of POSR and the unions. So, he emphasizes a contradiction between Allemane's republicanism and his socialism.

S. Reynols researchs what relation Allemane has with the Newspaper *Le Parti Ouvrier*. The first series, which is the result of the above alliance, is supported by V. Simon, the proprietor of the Radical's papers. For the second, third series and the printing shop, Allemane is financed by the young intellectuals. They lead the movement for dreyfusist and anti-militarism but their management of the paper conflicts with militants of POSR. S. Reynols concludes that Allemane's character controls the contradiction between the republicanism and the socialism and the conflict between workers and intellectuals.